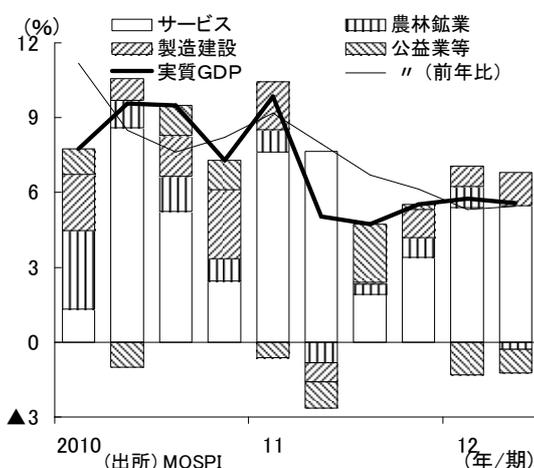


## 持ち直すインド経済

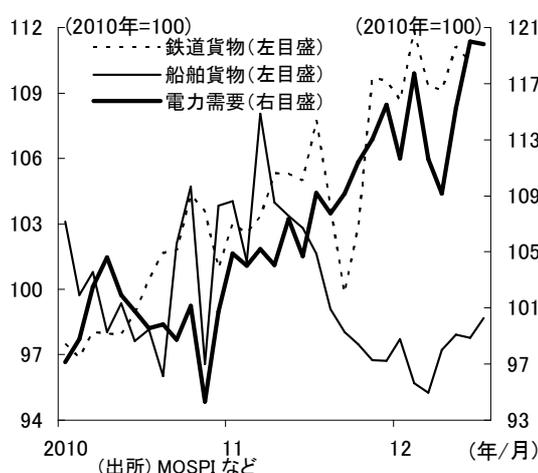
～ 懸念材料は食料価格の行方 ～

- (1) インドの4～6月期実質経済成長率が前年比5.5% (図表1)。2010年1～3月期の同11.2%成長、11年1～3月期の同9.2%成長をピークに急速に鈍化。欧米経済の低迷が直撃し、先行き不透明の見方が拡大。しかし季節調整を施してみると成長率は昨年央をボトムに昨年末から持ち直しへ。同国経済は第三次産業が過半を占める典型的サービス経済。産業別寄与度をみると、成長加速、減速ともサービス業が主因。
- (2) サービス業を分けてみると、昨年央の成長減速および昨年末からの持ち直しは運輸通信が主因。近年、通信業の成長頭は携帯電話。契約件数は昨年に入り増勢が鈍化したものの、今春まで年率1億件前後の増勢維持。成長変動は運輸セクターの貨物輸送 (図表2)。鉄道は昨年7月をピークに8～9月大幅減。ウタルプラデシュ州を中心に発生した連続事故が原因。復旧に伴い輸送量回復。しかし船舶貨物は昨春をピークに今春までほぼ月を追って減少。主因はルピー高に伴う輸出減速 (図表3)。09年3月をピークにルピー高が進行し実質輸出が本年初まで減勢。なお10年末から11年初の大幅輸出増は、自動車をはじめ外資進出に伴う工場の本格稼働に加え、港湾整備の成果。
- (3) しかし船舶貨物は、チェンナイ・エンノール港をはじめ本年4月から増勢回復。原動力は輸出の底入れ。前回は08年春にルピー安が始動して09年央に輸出増で1年強のラグ。通貨安から輸出増までのラグは各国でも1年から1年強。今回ルピー安は11年央始動。過去の経験則に照らせば、本年半ばは輸出が増加に向かう時期。全体の景況を示す電力需要量や通貨供給量をみると電力は今春増勢回復。通貨供給量は、年初までの増勢鈍化から民間向け貸出を牽引役に今春来増勢加速 (図表4)。総じてみれば同国経済は成長軌道復帰。懸念材料は食料品を中心とする物価動向。騰勢加速は金融緩和を阻害。北部インドをはじめ早魃、熱波の行方が焦点に。

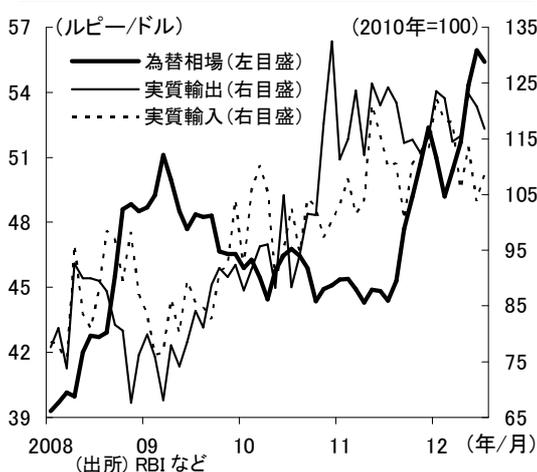
(図表1) インドの実質成長率 (季調済前期比年率)



(図表2) 貨物輸送量と電力需要 (季調済)



(図表3) 為替相場とインドの実質輸出入 (季調済)



(図表4) 名目GDPと貨幣供給量 (季調済)

